月の光と葵の乙女～天正争乱～

三好八人衆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の光と葵の乙女～天正争乱～

【Ｎコード】
Ｎ８４４１Ｖ

【作者名】
三好八人衆

【あらすじ】
普通の高校生だった鷹村聖一が、戦国時代の登場人物の一部が女性として活躍している戦国日本に降り立ってそれなりの月日が流れた。
勢力図は一変し、新たな時代へと進んでいくにつれて聖一と仲間たちは新たな戦いへと巻き込まれていく・・・

簡単な登場人物紹介（前書き）

１０月１日：『鷹村秀康』を追加しました。
１０月１３日：『他家の武将たち』項目を追加。『北条家』の『北条氏政』を追加しました。
１０月１６日：『上杉家』の『上杉景勝』『直江兼続』を追加しました。

簡単な登場人物紹介

主人公&ヒロイン
鷹村聖一（たかむらせいいち）
この物語の主人公。現代日本の高校生だったが、ある日、女性武将が存在する世界にタイムスリップしてしまう。世間からは広がった噂から『月の使者』と呼ばれている。拾ってくれた三河徳川家に仕え、弓の名手として、軍師として頭角を現していった。
性格は温厚で、怒ることはめったにないが、強い意志を持つ少年である。
今作では家康と夫婦になり、彼女との間に2人の子供を儲けている。

徳川家康（とくがわいえやす）
三河・遠江を統べていた戦国大名徳川家の女当主。聖一とともに勢力を広げ、武田家滅亡後は三河・遠江・駿河三ヶ国を治める大名に成長した。
今作では大名として、母として奮闘する。

松姫（まつひめ）
家康の娘。弟の福松丸とは違って大人しく、無口な性格。武術には疎いが政務に関して才能を示している。徳川家の嫡子。

福松丸（ふくまつまる）
家康の息子。姉の松姫とは違い、活発でやんちゃな男の子。武術全般に明るく、徳川家臣からは将来を期待されている。

鷹村秀康（たかむらひでやす）
聖一の養子。小麦色の健康的な肌と短く刈りこんだ黒髪でボーイッシュな印象の少女。武芸の才に秀でている。

家臣団

ここでは、前作から登場する家臣団を簡単に、今作から登場する家臣団を少し詳しく紹介する。

徳川四天王

酒井忠次（さかいただつぐ）

前回から登場した徳川家臣団筆頭。三河吉田城代であり、家康の叔母の夫として年若い主君を支える偉丈夫。

本多忠勝（ほんだただかつ）

愛槍・蜻蛉切を手に無双の武を奮う銀髪の少女。今日も徳川軍の先陣を切って、主君に勝利をささげる。

榊原康政（さかきばらやすまさ）

通称小平太。徳川家のマスコット的存在だが、戦場では頼りになる旗本部隊長。

井伊直政（いいなおまさ）

今作から登場。遠江国井伊谷城主。氷のような青い瞳に青い短髪が特徴。冷徹な性格の少女で、男を毛嫌いしており、聖一のことも嫌っている。

その他の家臣団

鳥居元忠（とりいもとただ）

前作から登場の徳川家の『お姉さん』的存在。いつも微笑みを絶やさないが、おこると誰よりも怖い・・・らしい。

服部半蔵（はっとりはんぞう）

徳川家の隠密頭。半蔵は通称で本名は正成（まさなり）。隠れナイスバディ。

渡辺守綱（わたなべもりつな）

徳川家に仕えるもう一人の半蔵。主に聖一に仕え、彼の護衛を主な任務にしている子犬のような少女。

本多重次（ほんだしげつぐ）

通称『鬼作左』。ザ・頑固親父。

石川数正（いしかわかずまさ）
徳川家の重臣で、岡崎城代。忠次とともに聖一を拾いに行った。広い視野を持つ人物だが・・・

大久保忠世（おおくぼただよ）
弟・忠佐（ただすけ）とともに徳川家に先代から仕える重臣で、家康が信頼を寄せる人物の１人。

酒井家次（さかいいえつぐ）
今作から登場。忠次の子。豪快な父・忠次とは違い、冷静な性格で丁寧な口調の少年。鉄砲隊を率いる部隊長であり、彼自身も鉄砲の名手である。

大久保忠隣（おおくぼただちか）
今作から登場。忠世の子。口下手で『あうあう』が口癖の金髪のツインテールの少女。家康に対する忠誠心は高いが、少々空回りしてしまいがち。家次のことが好き。

他家の武将たち

北条家（ほうじょうじまさ）
北条氏政
小田原北条家第四代当主。恰幅のよいカイゼル髭の中年男性で、自らを『皇帝』、そして北条領を『北条帝国』と称するなど、某ライトノベルの某ゆるゆる美少女皇帝を意識しているかのようなセリフを時々発する。自分でもよくは分からないらしいが、時々誰かよくわからない相手に向かって喋りだすことがある。

上杉家（うえすぎかげかつ）
上杉景勝
薄い青い髪をショートにした少女。養母・上杉謙信の跡目をお家騒動の末に継いだが、まだまだ力不足であり、国内の反乱を鎮めることができずにいる。物静かでクールな印象だが、打たれ弱く、家臣

の直江兼続の悪意なき毒舌にへこむことが多い

直江兼続（なおえかねつぐ）

上杉家期待の若き重臣。金髪の小柄な少年で柴犬のような一生懸命な性格で、頭もよく切れるが、悪意なく毒舌を吐いては景勝をへこませている。

・・・以下、どんどん増えていく予定です。

簡単な登場人物紹介（後書き）

『姫名』について

歴史上初の女性当主であった鎌倉幕府初代将軍・源頼朝（みなもとのよりとも）が平清盛に捕らわれた時に、父への復讐を目指して生き延びるために名を使い分けた――――そのエピソードを基に、女性が武の道を志すときは『男性としての名』と『女性としての名』を持つようになり、それが発展して『女性としての名を夫にのみ明かす』という風習が広まった。

大抵の場合、幼名の一字を取って姫名とする場合が多いが、幼名に『姫』がつく場合は幼名が姫名になり、元服後はその名では呼んではいけなくなる。

番外編～織田信長編（下）～

清洲城を本拠にした信長は、それまでの居城・那古野城を今回の簒奪劇の協力者だった叔父で守山城主の織田信光に任せた。
しかし――その信光は何者かによって暗殺されてしまう。信行派による暗殺が疑われるなか、信長が後任として城主に任じたのは・・・

その日、あるひとりの男が当主に呼ばれて緊張した面持ちで出仕してきた。主君から影で『骸骨』と呼ばれているほど頬骨が出て痩せ気味のこの男の名は林佐渡守秀貞（はやしさどのかみひでさだ）。かつては平手政秀とともに当主信長の後ろ盾だった人物だ。だが、いまは信長の器量に疑問を抱き、信行派に属している。
（わしが信行様擁立に動いている事は信長の殿もご存じの事・・・まさか殺されはしまいが、何の用事であろうか）

「おう、佐渡。久しいな」
「は、ご無沙汰しております」
当主の間には上座に信長、そのすぐそばには彼女の夫である生駒吉乃がいた。他に家臣の姿は見当たらず、武にさして長けているわけでもない秀貞だが、襖の裏に刃をきらめかせた者がいないことぐらいは感じることはできた。

「早速用件を言おう。那古野城の事だ。あの城が尾張防衛の要である事は説明するまでもなかろう？」
「無論でございます。織田家重臣としまして、あの城の防衛の任にあたるは経験豊富な信光殿を置いて他にないと思っておりましたが・・・」
秀貞がそう言うと、信長はニヤと笑った。
「いいや、おるぞ。誰だと思うか？」
「は・・・？柴田殿・・・でしょうか。それとも佐久間殿・・・？」
彼が首をかしげながら家中でも武に秀でた将の名を挙げていくが、主君は「違う」と首を振る。
「あまりオレを煩わせるな、佐渡・・・なぜ己の名が出てこぬ」
「え・・・わ、私でございますか！？」
目を見開いて驚愕する秀貞。まさか自らの名が出てこようとは夢にも思わなかったのである。
「そうだ。お主は織田家筆頭家老の家柄・・・何も不思議な事はあるまい？」
たしかに自分は代々織田家に仕える筆頭家老林家の当主だ。しかし自分は目の前の主君を倒そうとしている者の一味で、それは彼女も知っているはず。
まさかの事態に唖然とする秀貞は、「さっさと城に入れよ」と言って部屋を去った信長に対し、「主命なれば仰せのままに・・・」と返事をするのがやっとであった。

『林佐渡、那古野城主に任命さる』――――この報は瞬く間に尾張国中に広まった。動揺した信行派は『秀貞は信長派に走ったか』と疑い、また秀貞もこの空気を察して信行居城・末森城から距離を取

った。
離間の策に成功した信長は、さらに有力家臣である佐久間兄弟を味方につけることに成功した。ここに至り、危機感を覚えた信行派は自派の引き締めを図るため佐久間兄弟の討伐を決意。柴田勝家を大将に稲生（いのう）へと軍を進めた・・・

柴田勝家（しばたかついえ）。通称を権六（ごんろく）といい、先代信秀から仕えてきた猛将である。信行の後見人でもあった彼は、信長の奇行に頭を悩ませている家臣の一人であった。織田家を憂う彼は、『勘十郎様こそが織田家を守りたてていく方だ』と考え、信長排斥に加わっていた。
そしてこの日も、何を血迷ったか信長方に付いた佐久間信盛らを討つべく佐久間軍が砦を構えた稲生に軍を進めた。

そして――――思い知った。
（信長の殿は、『うつけ』などではない――――我らが、あのお方の器量を図るには小さかっただけという事か・・・）
こんこんと湧く水を、小さな升で受けきることはできない。すなわち、湧き出る水は信長の才。小さき升は自分たちの器の大きさを表す。
勝家は自分の眼前で突如現れた信長軍に蹴散らされていく我が軍に、認めざるを得なかった。
（信長の殿こそ、尾張を統べるお方）

後に北陸五ヶ国を統べ、主君のもとでその名を天下に轟かす柴田修理亮勝家が信長陣営の軍門に降るのにそう時間はかからなかった。そして勝家が軍門に降るのと前後して信行は討たれ、尾張は信長のもとで統一されていくのであった・・・

それから数年後。尾張を統べ、東海の雄・今川義元を桶狭間に葬った織田信長の姿は稲葉山城――――否、彼女が新たに名づけた『岐阜城』の天守閣にあった。

彼女の目の前に広がるのは、戦火から新たに復興して行く城下町の姿――――次に進んでいこうとする町民の姿だ。

「そうだな・・・吉乃。お前との約束を果たさなきゃな・・・」

最愛の夫が死んで一年が経った。元々結婚前から体が弱かった吉乃は、妻が天下を制する足掛かりを築く前に病に斃れた。

最期の日、2人きりになって最後に交わした約束を信長は胸に刻み込んだ。

『ねぇ、吉・・・僕はキミが天下の争乱を治めてくれる人だって信じてるよ』

『な、何言ってやがんだ・・・』

唐突に話し出した吉乃に、信長は戸惑いを隠さずに『いいから早く治しやがれ、馬鹿』と罵った。

『病人の世迷言じゃないよ・・・初めて会った時から、『この人は

ただの人じゃない』っていうのは何となくわかったんだ』
彼の笑みは幾度も観てきた。でも、ここまで彼は儚い笑みを浮かべる人だっただろうか？
『ね、吉。僕と最期に約束して』
『約束？』
ここまで話し続けて疲れたのか、深く息を吸って『約束』の内容を話した。

『もう二度と戦火で悲しむ人が出ない国を作って。キミならそれができるって僕は信じてるから・・・』
彼が息を引き取ったのは、その約束を交わした日の夜だった。
信長はその翌日から自分を信じてくれた夫の望みを叶えるため、今まで戦ってきた――――

そして――――

戸の外からは剣戟、怒号。鼻孔を突き、彼女の身体を撫でるのは炎。
右肩には矢が刺さり、赤き血がとめどなく溢れ出ている・・・
「本能寺・・・ここが、オレの最期の地か」
戸を開き、窓から見えるのは『水地の旗に白桔梗』の紋。アイツ（日向守）が刃を向けてくるなんて夢にも思わなかった――
「認識が甘かったって事だろうな」
１万余の反乱軍に対し、彼女を守るのは１００名ほど。小姓衆が戦ってくれているが、全滅は時間の問題だろう。
「アイツ（吉乃）はオレの物。オレはアイツの物だ・・・髪の毛一本だって、誰にもくれてやるものか」
信長は脇差を抜き、自らに突き立てた――肩からの傷とは比べ物にならぬほどの激痛と、薄くなっていく意識の中で、信長は最期に詫びた。
（思えば、短い夢だったな・・・悪ぃ、吉乃。お前との約束、果たせなかったな――）

――いいえ、キミはよく頑張りました。僕との約束をしっかりと果たしてくれました――

意識を失う直前、懐かしい『誰か』の声を聴いた気がした――

１５８２年に明智光秀によって起こされた軍事クーデター『本能寺の変』。発生までの経緯については現在でも様々な説が取り沙汰されている謎多き事件である。焼け落ちた本能寺から明智軍が総出で信長の遺体を探したが、見つからなかったという。

プロローグ

――――ボンヤリと、意識が現実の世界に打ち上げられていく。ふすま越しに耳に届く雀の囀りに、朝が来たことを悟る。朝の目覚めが早いことが数少ない取り柄の青年は、眠い目をこすりながら体を起こした。

取り立てて特徴のない青年である。黒髪に黒目とこの国の人間の標準的な容姿で、顔は・・・まぁまぁ整っているといったところか。

『2枚目にあと少しで手が届きそう』な感じか。

しかし彼がただ人ではない一面があった。

青年の名は鷹村聖一（たかむらせいいち）。この戦国時代の日本に迷い込んだ現代高校生だった青年である。

「ふにゅ・・・」

ゴソゴソと彼の蒲団から這い出してきたのは、乱れた寝巻を纏った長い黒髪の女性。普段は強い意志を秘めているその瞳はいまだに眠そうであるが、少し時間が経てば彼女は誰よりも立派で、凛々しい君主になることは彼と彼女の家臣たちは知っている。

彼女の名は徳川家康（とくがわいえやす）。三河・遠江・駿河の三ヶ国の太守にして、『東海の弓取り』と呼ばれる英傑。そして、現代高校生だった鷹村聖一青年とは夫婦である――――

「おはよう、竹姫（たけひめ）」
「おはようございます、聖一さん」
彼ら夫妻の朝は、向かい合ってのあいさつから始まる。これは出陣してるとき以外は欠かさず行う、決まりごとのようなものだ。
ちなみに聖一は家康のことを『竹姫』と呼んだが、これは『姫名』と呼ばれるもので夫の聖一しか呼ぶことが許されない秘密の名前である。
「さてと・・・今日の予定はなんでしたっけ？」
「茶屋殿の案内で、堺見物ですよ。早く着替えましょう」
聖一と家康、そして彼女の家臣たち２０名弱は今、織田信長に武田家滅亡後に駿河を拝領した礼を述べに上洛し、その帰りに京で店を構え、徳川家とは昵懇の仲である茶屋四郎次郎清延（ちゃやしろうじろうきよのぶ）の堺の屋敷に逗留していたのであった。

――――歴史上、深い謎に包まれた事件の幕開けは、夫婦にとって何の変哲もない朝から始まった。

家康と聖一が着替えを終えて朝食の席に顔を出すと、福顔の中年男性が２人を待っていた。
「おはようございます、三河守（みかわのかみ）様に鷹村様。昨晩はよう眠れましたか」
「おはようございます、茶屋殿。おかげさまで、よく眠れましたよ」
彼はこの屋敷の主にして、京でも有数の豪商である茶屋清延（ちゃやきよのぶ）。かつては武士だったが、父の代に廃業して今は呉服商を営んでいる。ち

なみに家臣たちは別の場所で朝食に舌鼓を打っているようだ。
茶屋も部屋を退いて、静かな朝食を食べ終えた2人はしばし談笑する。
「松姫も福松丸もお利口さんにしているでしょうか？」
ここで話題に上るのは、2人の愛しい我が子のこと。浜松城で留守を預かっている姉的存在に世話を任せているが、大人しい娘はともかくやんちゃな息子の世話は手が焼けるだろう。
「大丈夫だよ。2人ともいい子だから大人しく待ってくれているよ」

―――その時だった。
ドタドタと慌ただしい足音が響き、『殿！殿！』と家康を呼ぶ家臣の声がする。
「平八の声ですね」
平八―――本多平八郎忠勝（ほんだへいはちろうただかつ）は、2人の部屋の前で膝を折って「失礼いたします」と声をかける。中にいた2人は、自然な動きで上座とそのそばに控える。仲のいい夫婦の時間はここで終わり、主君と家臣の関係に戻る。
「入りなさい」
「はっ」
入室を促す主君に従ってふすまを開けた忠勝だったが、明らかにいつもとは様子が違う。明らかに慌てた様子であり、朝食を抜け出してきたのか未だに口元にご飯粒がついている。
「どうしたんですか、忠勝？ああ、口元にご飯粒が・・・」
「ご飯粒の事は今はどうでもよいのです！・・・無礼なのは承知しておりますが、緊急のことゆえお許しを」
忠勝は深く首を垂れると、その口から今日の明け方に起こった出来事を報告した。

「明智日向守、謀叛！織田信長公、本能寺にて討死！」

「え・・・？おねえ・・・さまが・・・・討死？」
呆然とする家康。聖一も表面上は冷静を保ちながら、心の中では「ありえない」と連呼していた。
（そんな馬鹿な・・・あの明智殿が？）
この頃に『本能寺の変』が起こるのもわかっていた。光秀は京で徳川家の接待役を行っていた。すべて史実通り。だが――――
（信長殿に絶対の忠誠を誓っていた彼女が？）
信長の重臣として、愛人として仕えて寵愛を受けていた彼女が謀叛を起こすなんて考えられなかったのだ。
「・・・確か息子の信忠（のぶただ）殿も京にいたはず。彼は？」
信長によって家督を譲られ、当主となっていた織田信忠も先日会っていた。
「明智が本能寺で信長公を討った後、二条城で京都所司代（むらいさだかつ）村井貞勝殿たちとともに明智軍と戦い・・・」
続きは口にしなかったが、信忠や貞勝がすでにこの世にないという

のは知れた。
「・・・すぐにでも、明智勢は僕らを殺しに来るだろう。茶屋殿にも話して、すぐに堺を脱出しよう」
「分かった。すぐに手配しよう・・・殿を頼むぞ」
忠勝が急ぎ足で出ていく。ふすまが閉められた後、聖一は懐に主君を抱いた。
押し付けるように抱きしめたのは、彼女の泣き声が屋敷中に響き渡らないようにだ。

「ぐすっ・・・聖一さん、ありがとうございました」
思う存分泣いたのだろう。目を真っ赤にしながら、彼女は礼をしてきた。
「聖一さん、帰りましょう。私たちの故郷に」
「うん。絶対に生きて帰ろう！」
準備を整えた後、茶屋や家臣たちと相談した結果・・・すでに封鎖されているであろう、近江を通って帰国する道はあきらめ、伊賀国を通って古くからの織田領である伊勢国から海路三河へ帰るという方針に決まった。
「伊賀越え・・・ですな」
一行の中では最年長の酒井忠次（さかいただつぐ）が厳しい表情を浮かべ、彼の隣に座る大久保忠佐（おおくぼただすけ）も嘆息する。
「信長公の命もあったとはいえ、三介（さんすけ）殿は少々やりすぎました。かの地の民が、織田と同盟している我らもともに恨んでいる可能性もあります」
三介殿とは信長の養子の１人である織田信雄（おだのぶかつ）の事である。信長には

実子・養子を含めて3人の子がいる。実子の信忠に養子の信雄（のぶ）・信孝（たか）だ。
養子の2人はともに一族の子で、それぞれ北畠（きたばたけ）氏・神戸（かんべ）氏という伊勢の名家との和睦の際に後継ぎとして送り込まれる際に、形として信長の養子にしていた。
しかし信雄は武将としての器量に乏しかった。以前、信長に無断で伊賀侵攻を行った上に惨敗を喫して叱責を受けている。再度攻め込んだ際にはその鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように伊賀を徹底的に攻め立てて、かの地を焦土と化したのだ。
「しかし、織田領ですらない紀伊や明智が網を張っている近江を通るわけにはいきますまい」
「大和は明智派の筒井順慶（つついじゅんけい）の領地だし・・・伊賀を通るしかないってことだよねー」
忠勝と康政の言うとおりだった。三河へ戻る一番の安全なルートは、伊賀しかないのだ。
「よし、出立しましょう！」
『ははっ！』
――――こうして、『神君伊賀越え』は幕を開ける――――

神君伊賀越えの章～第一話～

徳川家一行は茶屋四郎次郎清延と、父親が伊賀国出身で、国人とのパイプを未だに持つ服部半蔵を道案内にして堺を脱出して伊賀国に入った。徳川家の一行は家康・聖一をはじめとして道案内の服部半蔵に酒井忠次・大久保忠佐・本多忠勝・榊原康政・渡辺守綱・石川数正とお馴染みの面々に――――

「・・・なんだ、貴様」

「・・・なんでもないよ、直政」

「なら視線を私に向けるな、穢れる」

目が合っただけで聖一を罵倒する絶対零度の視線の持ち主は、井伊直政（いいなおまさ）という少女だ。氷のように青く、冷たい瞳に青い短髪から『氷女』と陰口を叩かれているが、家康への忠誠と将として有能であることは万人が認めるところ。ちなみに目があっただけで聖一を罵倒するが、忠次や忠佐など目上の男性の武将にはきちんと相手の立場に見合った対応をするため、目があっただけで罵倒される男は敵以外では自分だけらしい。

・・・泣いていいですか。

「へみゅ！」

可愛らしい悲鳴を上げて木の根っこに躓いて転んだのは、徳川家一行の最年少の少女。金髪のツインテールが可愛らしい小柄な女の子だが、彼女はただのドジッ子ではない。

徳川家臣大久保忠世の嫡子・大久保新十郎忠隣（おおくぼしんじゅうろうただちか）である。今回は叔父の忠佐について一行に加わっていたのだ。

「ほら、新ちゃん」
「ほぇ・・・あ、ありがとう小五郎君」
その彼女に黙って手を差し伸べたのは、小五郎と呼ばれたメガネの少年。彼に助けてもらった忠隣は、頬を薄く染めた。
少年の名は酒井小五郎家次。徳川家臣団筆頭・酒井忠次の嫡男で忠隣の想い人である。それぞれ通称の『新ちゃん』『小五郎君』と呼び合っている。ちなみに忠世は忠隣を溺愛しており、「新十郎を欲しくばわしの屍を超えて行け～！」と親バカぶりを発揮している。

徳川家一行は、宇治田原から近江国甲賀の小川城を経て伊賀に入った。途中、襲ってきた土民には茶屋が金銭を渡して退いてもらうなどしたが・・・
「我らの所持金目的に襲ってくる輩は、金銭を渡せば退いてくれますが・・・織田家に恨みを持つ者は、金では退いてはくれますまい」
戦闘力を持たない茶屋は、家康や聖一の近くで歩を進めている。彼は汗をぬぐいながら、そう忠告した。
「例えば・・・彼らのように、か？」
家康のすぐ前を歩く忠勝が、前を向いたまま後ろを歩く茶屋に問いかけた。一行の目の前に、竹槍やむしろ旗を掲げた土民の群れが現れた。彼らが持つ旗の一つには、何かをくるんだ球体の白い布が掲げられていた。
「忠勝、彼らはどう考えても金銭目的じゃないぞ」
「織田の代官を討ち取った後・・・というところか」
先頭を歩く半蔵が刀を抜き、それを合図に徳川家臣団も抜刀する。
一行の中には武将だけではなく茶屋や侍女など非戦闘要員もいるため、前に出て戦う者と後方で家康と弓を使う聖一、そして非戦闘要

員を守る者に分かれることになる。
土民たちは憎々しげな表情でこちらを睨みつけ、竹槍を構えてくる。
彼らは相当な憎しみを持ってこちらに襲い掛かってくる・・・その
執念を侮ってはならない。大切な者を奪われた彼らには同情はでき
る。だが・・・
「私たちは、ここで斃れる訳にはいかないのです」
徳川家康には夢がある。
三方ヶ原で敗れ、大切な人を失いかけ・・・我が子が生まれ、大切
な人と我が子の無垢な笑顔を見るたびに、膨れ上がってきた思い・・
・『天下泰平』。
「押し通らせてもらいます！」
家康の号令を合図に、伊賀山中を舞台に土民と徳川家臣は激突した。

神君伊賀越えの章～第二話～

普段から武芸の鍛錬を欠かさぬ武士と農業に勤しむ土民が戦えば、普通なら武士が勝つ。しかし、どちらも人間である。平安の木曽(きそ)の冠者源義仲(かじゃみなもとのよしなか)や南北朝時代の新田義貞(にったよしさだ)が一矢を受けて討死したように、急所に攻撃を受ければ身分問わずに死に至るのである。だから伊賀山中での戦闘でも、徳川家臣たちは竹槍を手に迫ってくる土民を相手に気を抜けぬ戦いを繰り広げていた。

徳川一行の陣形は先頭に服部半蔵・本多忠勝・酒井忠次・榊原康政・渡辺守綱が、家康と弓を使う聖一、そして数名の侍女と茶屋の護衛には大久保忠佐・井伊直政・酒井家次・大久保忠隣などが付く形である。

シュッ！

「ぐあっ！」

シュッ！
「がぁっ！」

聖一の正確無比な弓さばきから放たれる矢に射抜かれて、次々と土民たちが斃れ伏していく。容赦はしない。その油断こそが、戦場では命取りになることをわかっているから。
「見事な腕前ですな・・・さすがは『今与一（いまよいち）』鷹村聖一殿」
次々と土民を仕留める聖一の腕前に、茶屋が感嘆の声を上げる。平安の昔、弓の名手として知られた那須与一宗隆（なすのよいちむねたか）（資隆（すけたか）とも）に例えられる聖一の腕前は、数々の戦いを経て今や日本国中にその名は鳴り響いていた。
前線でも百戦錬磨の徳川家臣団はリーチの差で有利な土民の懐に飛び込んで斬りつけ、追い払うことに成功した。
「さあ、急ぎましょう。いつ連中が戻ってくるかわかりませぬからな」

―――後の現代日本では、よく知られている明智光秀による軍事クーデター『本能寺の変』も当時は現代との情報網の差もあり、なかなか地方に知られるのは遅かった。当時、織田軍は北陸・中国・関東・摂津などで地方軍を展開させていた。織田軍の中でいち早く情報を知ったのは摂津で四国へと渡る準備をしていた信長の子・信孝

擁する軍だったであろうが、信孝と彼を補佐する丹羽長秀は動くことができなかった。そしていち早く動いたのは皆さんご存知のあの人物である。そのなかで、敵対勢力の中でいち早く動いたのは関東・北条家であった。

関東北条氏４代当主・北条相模守氏政（ほうじょうさがみのかみうじまさ）は嫡子氏直（うじなお）を総大将に擁した５万余の兵を織田家の関東管領・滝川左近将監一益（たきがわさこんしょうげんかずます）の守る上野国に派遣した。

滝川一益は２万の軍を率い、居城の厩橋城（うまやはしじょう）を出て神流川（かんながわ）で北条軍を迎撃。一度は撃退することに成功するが、体勢を立て直した北条軍の策に乗り大敗を喫した。一益は上野から本拠地のある伊勢長島城に逃げ帰り、武田家滅亡後、武田家の旧領信濃に領地を得た織田家の武将たちも信濃を放棄して逃げ帰り、信濃・上野の国人たちは次々と北条の軍門に降った。

また、武田の本拠だった甲斐国を預かっていた川尻秀隆（かわじりひでたか）も武田旧臣が中心となって起こした一揆に討たれ、甲斐・信濃は主なき空白地帯となった。徳川家は主君不在で動けず、北の越後国・上杉家は内乱と越中まで出てきていた柴田勝家軍に抑えの兵を割かれており、川中島に出て北条軍と睨み合うのが精いっぱいであった。

その中で徳川家は主君や仲間たちが生きて帰ってくることを信じ、留守を預かる大久保忠世・鳥居元忠を中心に軍を編成させていた。

――いつでも主君の命令で軍事行動が起こせるように、臣下として準備を怠ることはできない。家康が帰ってきたとき、その時こそ徳川家の飛躍の時だと徳川家臣団の誰もが思っている。

神君伊賀越えの章～第三話～（前書き）

今回の章は短めにすることにしました。今月はちょっと忙しいので・・・

神君伊賀越えの章～第三話～

伊賀国（いがのくに）――――

現在の三重県西部に位置するこの国は、戦国時代は山に囲まれ『隠し国』とも呼ばれたこの国は足利一族の仁木（にき）氏が守護を務めた。しかしあまり支配力は強くなく、道路の整備なども整っていなかったこの地には地元の人間しか知らない廃寺がいくつかある。そのひとつに、武器を携えた土民が密かに集っていた。

「・・・お、おい。そりゃ本当か？」

「ああ。間違いねぇ。あの鬼みてぇな女は明智様に討たれた。その明智様がな、この伊賀を徳川の一行が通るって情報を下さったんだ」

下卑た笑いを浮かべる男は、持ってきた書状を仲間に向かって読み上げた。

「これは明智様の家臣の斎藤内蔵助（さいとうくらのすけ）様から頂いた書状だ。これを要略すると・・・『徳川一行は伊賀を通って三河へ戻ろうとするだろうので、これを阻止すること。男は皆殺し、女は捕えて好きにしてよい。ただし徳川家康だけは必ず捕えて京に送ること』だ。徳川の女どもは上玉揃い・・・いいか野郎ども！女は捕えた者が所有権を得る！早い者勝ちだ！」

首領格であったらしい、書状を持った男の号令にその場にいる者たちは雄叫びをあげた。

・・・・天井の戸板から2つの目が覗いているのにも気が付かず。

「む・・・？」
伊賀の山中を歩く徳川一行の先頭を歩く服部半蔵が『それ』を見つけたのは、何の変哲もない道に転がっている石の上だった。青・黄・赤・紫・黒に色付けされた米粒が、石の上を彩っており、一見すれば首をかしげて通り過ぎるようなものだが、半蔵にとっては意味がある物だった。
これは『五色米（ごしきまい）』といい、忍者が暗号として味方にメッセージを伝えるための手段の一つである。予め決めておいた配列などで味方に情報を伝えるのだ。味方からの情報を読み解いた半蔵は、味方の進軍を止めて家康のもとへ馳せ参じた。
「この先に敵が？」
「御意。我が服部家の情報網からの情報（ゆえ）故、確かなものかと。少し険しくはなりますが、伊賀を抜ける近道がありますので、そちらに道を変えてはいかがでしょうか？」
今まで半蔵はなるだけ家康の足に負担がかからないように、また、整備されていないながらも少しはマシな道を選んでは来たが、これからも敵が待ち伏せている可能性が高いことは否めなかった。さらに連戦、連戦となれば、いかに戦慣れた武将たちとはいえ疲れはたまって動きも鈍るだろう。
「・・・そうね。では、そちらを通りましょう」

半蔵に案内された抜け道は、まるで人が通らないような獣道であった。先頭が伸び放題の草木を斬り捨てながら進む。時折草むらから小さな物音がするたびに刀に手がかかるが、出てくるのは狸や狐の類ばかり・・・物音の度に神経が磨り減らされ、あまり体に良くな

い。しかしこの道は地元の人間でも知らないところらしく、人の気配は絶えて久しい。隠れて移動するのにもってこいの道であった。この獣道では毒蛇や毒虫がいるかもしれず、一行は急ぎ足で獣道を踏破。夜になり、廃寺で家康たちが足を休めていると、外で見張りをしていた大久保忠佐が報告のために入ってきた。

「山中のいたるところから篝火が？」

「は。恐らく連中、山狩りをして我らを探しているものと思われます」

この廃寺を案内した半蔵曰く、この山中には伊賀の上忍――――『百地（もち）』『藤林（ふじばやし）』そして『服部』のそれぞれの一族が有する、それぞれの一族しか知らないこの建物のような隠れ家があるらしい。このような隠れ家は一族の中でも直系の人物しか知らないという。

「あるとは思えませぬが、偶然連中がこの隠れ家に辿り着いてしまう・・・ということが無きにしも非ず。気を入れて見張りましょう」

家康と侍女たち、そして茶屋は廃寺の中で休み、家臣団と聖一は交代で廃寺を守備する体制をとった。弓を使う聖一と夜目が効く半蔵は木の上で遠くを見張り、小姓を含む徳川武士たちは家康たち非戦闘要員を背に、廃寺の中から外を見張った。これは篝火を外で焚くことで敵から発見されるのを防ぐための措置である。

一行は極度の緊張の中、眠れぬ夜を過ごした・・・・

幸いにも隠れ家が発見されることはなく、朝を迎えることができた。ともかく、分かったのはすでに明智勢によって『信長死す』の知らせが広まっているという事――――ついに伊賀を突破し、伊勢に辿り

着いた徳川一行は茶屋の伝手で入手した船に乗り、三河への帰路に就いた。
しかし、彼らに休まる暇はない。関東の雄・北条家との対決が待っているのである・・・

天正壬午の乱の章～第一話～

関東・・・現在の日本国の首都である東京が置かれている地方である。この地は足利尊氏によって室町幕府が開府されて以降、常に争乱と隣り合わせであった。

京に幕府を開いた尊氏は関東を治めるための出先機関を鎌倉に置き、長官として息子・基氏を派遣した。これが『鎌倉公方』の始まりである。鎌倉公方の補佐には『関東管領』が置かれ、上杉氏が代々世襲した。

鎌倉公方は相模・武蔵・上野・下野・下総・上総・安房・常陸の八ヶ国（まとめて関八州と称する。それぞれ順番に現在の神奈川県・東京都及び埼玉県・群馬県・栃木県・千葉県全域・茨城県）に甲斐・伊豆を支配し、これに後に加えられた出羽・陸奥を治めた（それぞれ山梨県・静岡県の伊豆半島及び東京都伊豆諸島・青森県・岩手県・宮城県・福島県全域・秋田県・山形県全域）。

初代鎌倉公方・足利基氏は兄で二代将軍の義詮と協力して関東の統治に努めたが、彼の子の氏満、孫の満兼と代を重ねるごとに対立していった・・・しかし反乱が起ころうとするたびに関東管領上杉家の歴代当主が文字通り命を懸けて制止して事なきを得ていたが、ついに四代鎌倉公方・持氏の代には持氏が対立を深めていた時の関東管領上杉憲実を討伐する軍を憲実の領国上野に派遣。対して当時の六代将軍足利義教は関東及び周辺の諸将に憲実救援を命じ、ついには持氏を討ち滅ぼした。１４３８年から翌３９年まで起こったこの戦乱を永享の乱という。

その後鎌倉公方は再興を果たしたが、混乱を経てその機能は下総国の古河城に移り、『古河公方』を名乗るようになる。８代将軍義政はそれに代わる存在として、異母兄の政知を派遣したが、当時の関東の情勢不安から鎌倉に入ることができず、伊豆の堀越に居を構えることになった。この事からこちらは『堀越公方』と呼ばれた。

「――しかし、我が曾祖父である早雲公・祖父氏綱公そして我が父氏康が両公方、関東管領といった旧勢力を討ち破り、この小田原城を中心とした北条帝国を築き上げたわけだな」
「大殿、誰に向かって喋っておられるのです？」
小田原城、本丸。武田信玄・上杉謙信でも攻め落とせなかった天下の名城の主の名は北条氏政という。立派なカイゼル髭を蓄えた立派な体格の彼こそ、戦乱に荒れていた関東を制覇しかけている北条家の四代当主である。
「うむ？ワシにもよくは分からんが、喋らなければならん気がしてな。そしてワシは『大殿』ではなく『皇帝』であるからして間違うことないように。ところで我が子・氏直率いる北条帝国軍はどうしておる？」
氏政はなぜか北条家を『北条帝国』当主である自分を『皇帝』と呼ぶよう家臣や民に強要する。別に呼ばなかったからとはいって罰があるわけでもないというところが、彼の人の好さを表しているかもしれない。
実はどこかのゆるゆる美少女皇帝を意識しているのかもしれない・・・まさかね。
「氏直様は神流川で滝川一益を破り、現在は上野諸将の掌握に努めておられるようです。この分では、信濃・甲斐の平定も容易いかと」
家臣の報告に、氏政は満足げな笑みを浮かべた。
「今回の遠征には、我が北条帝国軍の威光がかかっておる」
本能寺の変をいち早く知った氏政の決断は素早かった。嫡子・北条氏直を総大将に5万余の軍勢を、不可侵条約を結んでいた織田領・

上野に派遣。滝川一益を打ち破ってこの地を制し、続いて織田の諸将が逃げ散って空白地帯と化した信濃、そして川尻秀隆の守る甲斐を制する腹積もりであった。

徳川家嫡子・徳川松姫（とくがわまつひめ）の両親はとても仲良しだ。それは彼女にとってとても嬉しいことであった。自分と弟しかいないときは、いつでも寄り添っている。範囲的には手が届くところには2人は必ずいる。夜はいつでも2人はいつでも一緒に寝る。彼女と弟は別の部屋で寝る。ちなみに夜の間の両親の部屋には行ったことがない。近付こうとすると、どこからともなく半蔵がやってきて、部屋に連れ戻されるからだ。その時は絶対半蔵は「姫にはまだ早いです」と言う。以前、両親の部屋から漏れ聞いた声から彼女なりに察して半蔵に「母上は父上に虐められているの？」と口にしたところ、半蔵は真っ赤な顔で「そのことはお忘れください！」と叫び、小さな声で「鷹村・・・コロス！」と物凄くドスを効かせた声で呟いていた。

・・・翌日、父がボロボロになって修練場に転がっていたが、何か関係があるのだろうか？

領国に戻った徳川家は、ただちに軍を動かした。家康率いる本隊は、

光秀を討つべく尾張方面に、聖一率いる別働隊は新たに領地になった駿河国に入った。信濃方面で戦線を展開させ、伊豆でも軍を展開させている北条軍に備えるためである。江尻城に入城した聖一は甲斐を治める織田家臣・河尻肥前守秀隆（かわじりひぜんのかみひでたか）にもとへ、信濃へ向かうであろう北条軍に対してともにこれに当たろうという書状を持たせた使者を送るが――――

「河尻殿はすでに討死！？」

「は。河尻殿はどうも甲斐の国人衆からの評判が悪かったようで、信長公が斃れたと知れると同時に武田旧臣を中心にした一揆衆に甲府城を攻められ・・・」

詳しく聞くところによると、信長から甲斐を預かった河尻秀隆は武田旧臣を『自分に申し出れば以前の給与で召し抱える』と触れをだし、その言葉に釣られてやってきた武田旧臣を処刑するというやり方で甲斐の国人から恨みを買っていたらしい。その不満が高まって、ついに爆発し――――といったところだろう。聖一が発した使者は甲斐に到着する直前に、ある人物から教えられたという。

「ところで、ですな・・・一揆の主導者であった三井弥一郎（みついやいちろう）と初鹿野信昌（はじかのぶまさ）両名からと思われる書状を預かってまいりました」

それを聖一が開くと、確かに三井・初鹿野両名の署名が記されていた。それによると、彼らは河尻に代わって徳川家に甲斐を治めてほしいと記され、徳川家が甲斐に入ったあかつきには彼ら武田残党軍は徳川家に降るというものであった。恐らく、織田信長による武田征伐の際に、武田の残党を徹底的に滅ぼした織田家に対して徳川家は彼らを保護したからではないだろうか・・・と聖一は推察した。

「罠・・・という可能性は？」

「多分だけど、ないと思う。武田が滅び、河尻殿が討たれた以上、甲斐に徳川家に対抗できる戦力はない。私たちが新府城を占拠するのは容易い」

駿河方面の軍を一任されている聖一は諸将を呼び集めて改めて軍議を開いた結果、甲斐への行軍を決定。江尻城と伊豆方面への抑えを

大久保忠世に任せ、その旨を本隊へ通知した後に江尻城を出立した。

甲斐への進軍が江尻城内の者に知れ渡ると、彼らは進軍準備の為に一斉に動きだした。そのなかで、一人の少女が具足の音を鳴らして奥の間へ歩いていた。

健康的に焼けた小麦色の肌と短く刈りこんだ黒髪でボーイッシュな印象を与える少女は、本来は快活によく笑う表情を緊張に固めており、彼女がまだこの具足と腰に佩(は)いた刀の重みに慣れていない事が窺えた。

彼女は奥の間と廊下を遮る襖の前に立つと入室の許可を得て部屋に入り、目的の人物が一人でいるのを確認すると、口を開いた。

「とーちゃん！甲斐に攻め込むのか！？」

「そうだよ、秀康(ひでやす)。どうした？緊張してる？」

「し、してるもんか！」

少女の名は鷹村秀康(たかむらひでやす)。聖一の娘だが、彼との間に血の繋がりはない。もとは浮浪児であったが、縁あって彼の養子になった。武芸の才に秀で、『松を守るのはあたしの役目！』が口癖で、聖一夫妻の子とも上手くいっている頼りになる姉貴分だ。聖一個人の養子であるので、彼女は後々聖一個人の領地を継ぐことになっている。

「攻め込む・・・って言っても甲斐には敵はいないから、新府城を接収するくらいだよ。緊張することはないさ」

（とはいえ―――絶対に北条軍と激突することになる。それまでに甲斐を掌握しておかなきゃ・・・）

敵は大国北条。彼らを相手にするには時間が必要であった・・・

天正壬午の乱の章～第二話～（前書き）

そういえばこの章、セリフより説明が多いですね・・・

天正壬午の乱の章〜第二話〜

聖一率いる徳川軍別働隊は首尾よく新府城に入った。武田残党軍は約定通り徳川軍に降り、徳川軍による甲斐・信濃制圧に助力すると語った。

聖一は武田旧臣である曽根昌世（そねまさただ）を使って武田旧臣の調略を行い、駒井氏などの勢力を徳川方に味方させることに成功し、甲斐を徳川家の領地にすることに成功する。一方、明智光秀を討つべく京を目指していた家康率いる徳川本隊は尾張国で『ある知らせ』を受け取り、軍をそのまま東に戻した。途中で本隊から酒井忠次隊が離脱して信濃国に入り、北条方の諏訪頼忠（すわよりただ）が守る信濃国高島城の攻略を開始した。

信濃国・川中島――――

口惜しい、と少女は思う。眼下に広がる彼女の養母（はは）が宿敵と五度に渡って対峙したこの地で、自分は何をしているのだろうと。薄い青い色のショートヘアーの少女は爪が肉に食い込むほどに拳を握りしめていた。

彼女が養母の後を継ぎ、越後国を治めるようになったのはつい数年前の事。養母が急死し、実子のなかった先代の後継ぎを巡って内乱が起き、それを治めたのはこの少女であった。

少女の名は上杉喜平次景勝（うえすぎきへいじかげかつ）。先代上杉謙信の姪（姉の子）で、実子のない彼女の養子となっていた。越後上杉氏の後継問題である『御（お）館（たて）の乱』で勝利を収めて上杉家の当主となっていた。しかし、天才

的な軍事の才とカリスマ性で内乱が絶えなかった越後を治めてきた養母と比べて、彼女は国人たちからすれば組み易い小娘にすぎなかった。

それを象徴するように、御館の乱で功がありながら恩賞問題で不満を募らせていた北越後に居を構える勇将・新発田重家が織田氏・伊達氏・蘆名氏と結んで反旗を翻したのである。

（いまだに私は新発田ごときの反乱を独力で解決できず、養母様が制した能登・越中も織田勢に奪われてしまった・・・）

景勝は自ら軍を率いて新発田征伐に赴いたが、反乱軍が籠った新発田城の堅牢さと東の蘆名氏や西の織田氏からの攻勢の前に幾度も撃退され、また、それらの対処に兵を割かれて新発田征伐に本腰を入れることができずにいた。

そして今。北信濃防衛の為に川中島に連れてきている兵は、北条軍の１０分の１の５千。新発田重家への抑えと、越中の佐々成政軍の備えのためにこれぐらいしか動かせなかったのだ。

（ともかくここを凌ぎ・・・）

「殿！」

振り向くと、向こうから甲冑を身に纏った金髪の少年が駆けてきていた。景勝の幼馴染にして家中から『殿の懐刀』と称される彼の名は直江山城守兼続。彼が景勝に向ける忠誠心と何事にも精一杯取り組む姿勢。そして今、小柄な体を目一杯動かして駆け寄ってくるその姿は、小柄な柴犬を連想させる。彼は膝をつき、頭を垂れて報告した。

「北条家からの使者が参っております。恐らくは、和睦交渉の使者かと」

「・・・なぜ、そう思う？」

静かに問いかけた景勝だが、もちろん彼女にも見当がついている。あえて兼続に問いかけたのは、自分の頭の中にある答えと彼の頭の中にある答えが一致しているかどうかを確かめるためだ。

「北条としては、国内問題もロクに解決できぬ上杉を相手に兵の疲

れを積み重ねたくないところ。不世出の英雄であらせられた謙信公とは月とすっぽん・・・いや、それではすっぽんに失礼でした。月と石ころの差もある景勝様ではもはや関東平野に出てくることもできず、土俵の上にも上がれない上杉よりも、精強な徳川軍を相手にする為の力を蓄えておきたいところだと思いま・・・あ、あれ？殿、なんでそんなに落ち込んでおられるのですか？」

「い、いや・・・なんでもないぞ、なんでもない。落ち込んでなんかいないぞ・・・」

ふと気が付いて兼続が顔をあげると、主君・景勝は『どよ～ん』とした落ち込んだ雰囲気を纏い、膝から崩れ落ちて落ち込んでいた。彼女のハートが兼続からの攻撃に耐えられなかったのだ。

この兼続少年。主君景勝に対して悪意は全くなく、その進言も的確なのだが、いささか毒を吐くきらいがある。

「い・・・行くぞ兼続」

「はっ」

なんとか心のダメージから立ち直った景勝は、兼続を伴って北条家からの使者が待つ本陣に向かったのであった。

「北条と上杉が和睦？」

北条方の諏訪氏の守る高島城を包囲した酒井忠次が隠密頭・服部半蔵の報告を受け取ったのは、ちょうど高島城への攻撃を中止して息子家次とともに食事をとっていた時だった。

「はい。国内の鎮圧を急ぎたい景勝と、信濃を制したい北条の思惑が一致した結果でしょう。すでに上杉軍は越後に引き揚げ、北条軍は前線基地に定めた小諸城に入ったとのこと。すでに殿からは酒井

殿に新府城に引き揚げるよう命が出ておりますので、早急に引き上げますよう」
それでは、と半蔵はさっさと引き揚げて行った。
「父上、我らも急ぎ引き揚げましょう。3千ほどの我が軍では大軍に抗しけれませぬ・・・それに諏訪軍には我が軍を追撃できるほどの戦力もありますまい」
「うむ・・・者ども！新府城へ撤退する！」
家次の進言に対して、即決した忠次は即座に撤退を命じ、酒井隊は甲斐・新府城に向けて退却した。
北条氏直率いる四万余の軍勢が酒井隊を追ったものの、追い切れずに酒井隊の撤退を許してしまった。

東海の雄・徳川家当主の夫という顔とは別に、軍師としての一面を持つ聖一は家老の一人である石川数正とともに外交を担当している。岡崎城代として西の外交を担当する数正と、浜松城で家康の補佐をしつつ東の諸大名との窓口になっている聖一は、新府城を制した後も普段通り大名家に向けた書状をしたためていた。宛先は常陸国（ひたちのくに）の佐竹家。関東で北条家と互角に戦えるほぼ唯一の大名家だ。
その佐竹家当主・義重（よししげ）は『鬼義重』の異名を誇る猛将であるだけにとどまらず、外交戦術を駆使して勢力を広げている有能な政治家である。佐竹軍に動いてもらい、北条軍を牽制してもらうのが狙い・・・佐竹家としても北条家がこれ以上範囲を広げるのは望むところではないはず、と読んでの交渉である。
「これを佐竹の当主殿に。道中、気を付けて行ってくださいね」

「はっ。ただちに太田城（佐竹氏居城）に向かいまする」
書状を預かった家臣が出ていくのと入れ替わりに、もう一人の家臣が入室してきた。
「殿（聖一）、大殿（家康）が新府城に入られました」
「分かりました。すぐに行きます」
いつものように静かにスッと立ち上がり、報告に来た家臣の横を通って門へと向かった。

しかし、聖一の家臣は見逃さなかった。
（やはり、大殿を待ちかねておられたのだな）
部屋を出た瞬間、主君の足が僅かに早まったのを。

天正壬午の乱の章～第三話～

小諸城。信濃国東部、現在の長野県小諸市に築かれた城である。滝川軍を破り、上野国から信濃に入った北条軍は、徳川方の依田信蕃を破って小諸城に入った。

北条軍総大将・北条左京大夫氏直はひとり、部屋に籠って瞑想をしていた。

氏直は父の氏政とは違い、均整のとれたスタイルで城の侍女や町の娘たちから人気がある。寡黙で必要なこと以外は口を開くことは少ないが、侍女や町娘たちは『それがいい！』と言うそうな。

黒い瞳に長い黒髪、精悍な顔つきで名門北条家の次代を担うに相応しい青年である。

彼が瞑想をする部屋の戸が叩かれ、家臣が戸の外から声をかけてきた。

「若殿、諸将が集いました」

「・・・そうか、今行く」

氏直は家臣に案内されながら、敵将・徳川家康はどのような手でこちらを迎え撃つつもりだろうかと思案を巡らせた・・・

ユラユラ、ユラユラ。

彼女が見上げる甲斐の空。大好きな人に背を預けて尊敬する女も見上げた空はなかなかいい景色だ。

雲一つない快晴の空、というわけではないが、眺めていて気持ちの良い空模様。先ほど西から軍を返して甲斐の新府城に入った徳川家康は、夫の胸に背を預けてポツリと呟いた。

「絵でも描きたいですねぇ」
「・・・竹は絵、得意だっけ？」
「気分ですよ、気分」
空を見上げて今度は鼻歌を歌ながら、彼女は先日の出来事を反芻していた・・・
（備中から韋駄天のごとき速さで退き、お姉様（織田信長）を討った明智日向（あけちひゅうが）を僅か十日前後で山崎の地に葬った・・・羽柴筑前（はしばちくぜん）。これから起こるであろう、織田家の主導権争いで一歩前進したといってよいでしょう。主導権争いでまず真っ先に立ちはだかるのは柴田修理殿・・・しかし、柴田殿では羽柴殿には勝てない。織田家の主導権を奪った彼女が柴田殿を倒した後に何らかの手を向けてくるのは我が徳川家）
近い将来、徳川と羽柴の対決は避けられない。対決に備えて甲斐・信濃を掌握し、なおかつ背後の北条家と何らかの形で良好な関係を築かなければ・・・

「あらあら、相変わらずお熱いお2人ですね～」
「ひ、彦姉（ひこねえ）っ！」
聞きなれた声に慌てて振り向くと、聖一の背中越しに彼女の姉的存在である鳥居元忠――――通称彦姉が微笑ましげに見ながら立っていた。
普段ならこの夫妻は主君と家臣の立場に戻るが、現れたのが彼女なら話は別。家康が生まれた時の事も知っている元忠は、夫妻が自然体でいられる数少ない人物だ。
「もうっ。いつからいたんですか？」

照れくさそうに抗議しつつ、聖一から降りて頬を膨らませる家康。
それに元忠はニコリと笑みを浮かべて
「殿が聖一さんに胡坐をお命じになって、その上にお座りになられてから見ておりました」
「それはもう最初からって言うんですよぉ！」
頬を赤らめてバタバタと地団駄を踏む彼女。聖一は我が妻ながら、何この可愛い生き物！と思った。
「コホンッ。そ、それより彦姉、何か用があったんじゃないですか？」
家康が咳払いをして誤魔化すと、元忠も表情を引き締めた臣下の顔で告げた。
「申し上げます。北条氏忠（ほうじょうじただ）率いる別働隊がこの新府城に向かって進軍中との知らせが入りました。御下知をお願いいたします」
「・・・北条の別動隊はどこから？」
聖一もスイッチが入り、緊張感を纏った表情で元忠に向き直る。
「草（忍びの者）からの知らせによれば、敵勢は1万。御坂峠から郡内地方に入る模様ですわ」
「・・・そうなると、迎撃地点は黒駒（現在の山梨県都留市）辺りね・・・聖一さん！」
「はっ」
「そなたに鳥居・三宅康貞（みやけやすさだ）・水野勝成（みずのかつなり）の3将と兵2千を預けます。黒駒に向かい、北条勢を撃退なさい！」
『ははっ！』
聖一と元忠は頭を垂れ、足早に当主の間を去った。

「聖一さん、ひとつお聞きしても？」

黒駒に急行する徳川軍別働隊の中で、甲冑と弓を持った聖一の隣に並んだ元忠は口を開いた。
「何か策はありまして？」
「特にないです」
キッパリと言い切った彼に、キョトンとしている元忠に少し付け加える。
「北条軍は対滝川・対上杉などの連戦に加えて山道の多い信濃の山々を行軍してきてかなり疲労しているはずです。それに対して我が軍は疲れもなく、士気も高い。黒駒は狭い地形故、北条軍の動きを封じて側面攻撃を仕掛ければ容易く撃退できましょう。それにこの戦いにさえ勝てば、北条はこちらに対して今回以上の軍事行動は起こせませぬ」
「その根拠は？」
小首を傾げて質問してくる元忠に対し、聖一は人差し指を口元に充ててウィンクした。
「それは内緒です」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8441v/

月の光と葵の乙女～天正争乱～

2011年11月28日02時58分発行